



○本物

内モンゴルのイメージ(草原のゲル)⇒

令和3年も終わろうとしています。2年前には、これほど新型コロナウイルス感染症が社会生活、ひいては人生そのものにも影響するとは考えてもいませんでした。三刀屋高校生、掛合分校生が楽しみにしていた台湾旅行も、中止、変更を余儀なくされました。実施した県内研修旅行では、県内の魅力の新たな発見、気づきがあったものの、より視野を広げる意味でも、一日でも早くふたたび海外に気軽に行ける日が戻ることを祈るばかりです。



20年以上前に中国の内モンゴルに一週間ほど旅行で行ったことがあります。といっても、観光バスで観光地や名所旧跡を巡るわけではありません。一週間、馬に乗ってモンゴル高原の草原とゴビ砂漠を横断するというものでした。宿泊はゲルという遊牧民の伝統的な移動式住居。そのゲルも自分で建てる体験をするというかなり変わったツアーでした。砂漠でたてたゲルは真夜中の砂嵐で倒壊し、砂の上で夜を明かしたことありました。

ちなみに、内モンゴルに興味を持ったのは、山崎豊子の小説『大地の子』の主人公である陸一心が、文化大革命の時に送られた労働改造所のあったところだったからです。そこで、残留日本人孤児であった彼が羊飼いをしながら日本語を学んだ草原に一度は行ってみたいと思ったのが発端です。NHKでテレビドラマ化された時も、モンゴル高原の草原風景は壮大であり印象的でした。

内モンゴル旅行での最初の夜。草原はまさしく満天の星空でした。高原だからか、星空も近く、杞憂という言葉のごとく、満天の星が地面に落ちてくるかの錯覚を覚えたことを今でも忘れません。また、翌朝「地平線」に登る太陽を見たのもこの時が最初で最後です。

このツアーで衝撃だった体験はほかにもたくさんあります。例えば、休憩で馬から降りた際にふと手綱を離したために、馬が草原の彼方に向かって逃げ出しました。ガイド役の遊牧民の方に、「追うな！」と制止されました。理由は、山などのランドマークのない広い草原では、慣れていないとすぐ自分の位置がわからなくなって迷い、探すこともできないからでした。また、途中休憩させてもらった現地の遊牧民のゲルで、羊の血の入ったチャイ(ミルクティーのようなもの)を振る舞われました。血には塩分があり、海がなく川が少ない高原では塩や水が貴重だとあらためて実感しました。当然トイレは水洗ではありません。日本のあたりまえとの違いにとまどいました。夕食に、生きている山羊を旅行者が処理して食する経験もしました。と言っても、食べることは感傷的になってできませんでした。内モンゴル遊牧民のナダム草原観光祭に参加し、モンゴル相撲で張り切りすぎて指を骨折したことも忘れられない思い出です。旅行の途中で草原から砂漠までの移動にバスを使いましたが、15時間以上かかったバスでは、車窓の風景がまったく変わらず、つまりいつまで経っても同じ草原の風景が広がっているだけで、バスが先に進んでいるのかどうか不安になりながら、時間の流れの違いにとまどったこともありました。

このような体験は、決してオンラインやVRでは味わえないものです。その土地に行かないとわからないことや空気感があります。ICT化が進むことで様々なことが便利になってよいのですが、それでは決して得られないことやわからないことがあることは忘れないようにしないといけないと思っています。

授業での話し方を勉強しようと、40代の時に落語や漫才を聞くことに少しはまったことがあります。そこで、「間(ま)」や「場の空気を読む力」、そして「観客を取り込む力」の大切さを感じました。同じ噺家の同じ落語をテレビで聞くのと、実際に寄席で聞くのとはやはり違います。観客の雰囲気や観客との間をうまくつかんだ寄席だと自然に笑ってしまうことも、テレビだとそこまでということもままあります。コミュニケーションも同じです。対面でしか伝わらない、SNSでは誤解してしまうことがあることも、コロナ禍だからこそ強く考えていく必要があると思っています。